26　次の文章は、　『十二の風景画への十二の旅』の「第四の旅　氷の鏡」の全文である。これを読んで、後の問いに答えよ。

〈広島大〉　二〇一五年度出題

　私がその地方に滞在しているうちに雪が降りはじめ、幾晩も幾晩も降りつづけた。私はもう少し早くここを立ち去って、太陽の明るい南国の豊かな地方に行けばよかったと内心舌打ちしたいような気持になった。毎日鉛色に曇った空の下を無数の雪片がちらつき、窓ガラスは凍りつき、部屋の中はの火があるにもかかわらず、寒かった。雪がこう深くなると旅立ちはもう無理だった。

　の主人は私が雪に閉じこめられたのを気の毒がったが、決して南国に旅立つことに賛成しなかった。私が寒さについてぼやくと、主人はをくゆらしながら、頭を振って「雪国には雪国の楽しさがありますがね。もう間もなく池が厚く凍りますから氷滑りもできますし、猟師仲間と狩りにゆく楽しみもありますが」と言った。そして私にヴィルケという男の話をしたのである。

　ヴィルケはもともとこの山国に生れたのだから、彼がどうしてそれほど冬を憎むようになったのか、誰にも分らなかった。ただヴィルケに会った人たちは、彼が寒さを呪い、冬のらすものすべてを罵倒する言葉を始終聞かされる羽目になるのだった。

「ああ、たまらない、たまらない。この世に要らないものがあれば、それはまさしく冬だね。どうしてこの世はいつも春のように楽しくないのかね。春になれば草木もみどりになる。太陽も明るい。花だって野山に咲き乱れる。だが、冬は死の季節だ。木も枯れ、草も枯れる。どこを見ても華やかな色なんてありはしない。そのうえまるで死んだこの世にを着せるように雪が白く覆ってしまう。①冬の長いこの国に生れたのは俺の最大の不運だよ」

　村の人たちはヴィルケの愚痴はもう沢山だと思ったが、しかし氷を割って水をんだり、手に霜焼けをつくって労働しなければならないとき、ふとヴィルケの言葉を思い出し、彼の言葉にも真実はあると思うのだった。

　ヴィルケにとって特に腹立たしかったのは、冬になると山や森に獲物が沢山姿を見せることだった。ヴィルケは猟師仲間とともに雪を踏んで獲物を追ったが、もしそれが太陽の明るく照る春だったら、どんなに心が躍るだろうと舌打ちしながら考えた。森の奥の仮り小屋で、をしながら吹雪をやりすごすような夜、寒さと焚火の煙でろくろく眠ることもできなかった。といって、冬の季節を怠けて暮すわけにはゆかなかった。ヴィルケは口のなかでぶつぶつ言いながら猟師仲間について森や谷を歩きまわったのである。

　そうしたある日、森の奥でヴィルケは見事な角をはやしたを見つけた。ヴィルケは二人の仲間とともに鹿を追った。鹿のほうも追われていることに気がつくと、身を翻して森の奥へ逃げた。たまたま領主が美しい鹿の角を求めていたので、それを仕留めればな報酬にありつくことは明らかだった。ヴィルケと二人の仲間が夢中になって鹿を追ったのはそのためである。

　しかし半日ほど追跡した揚句、ヴィルケたちはその牡鹿を見失った。どこを捜しても足跡一つ見つけることはできなかった。

　三人は夢から覚めたように辺りを見まわした。すでに日暮れが迫っていた。しかし山の形にも雪に覆われたの森にも見覚えがなかった。そのときになってヴィルケたちは、鹿を追うのに夢中になっていて、雪山の中で道を失ったことに気がついたのだった。あたりには仮り小屋を作る場所もなく板ぎれ一つなかった。犬たちも不安におびえ、時おり悲しげにえした。雲行きもあやしく、夜のうちに吹雪になりそうな気配だった。三人は山の斜面を下り、最後の光が消えるまで、見知った地形を捜そうと必死になって歩きまわった。そのうち②容赦なく夜が黒く山々の上におりてきた。夜とともに風が吹きはじめ、峰々がごうごう音を立てて鳴った。

　ヴィルケの前を歩いていた他の二人の姿が、猟犬とともに突然見えなくなったのは、山の斜面を行き尽そうとしている時であった。一瞬、何が起ったのか、ヴィルケには理解できなかった。が、やがて、夜の底に白々と浮ぶ雪の斜面に大きな黒いがあいているのが見えた。二人は猟犬たちとともに、その黒い孔から落ちたのであった。おそらく雪が崖の上にのように突き出ていて、誤って二人はそこに足を踏み入れてしまったに違いなかった。

　しかしヴィルケはこの夜のなかではどうすることもできなかった。下手に動けば彼自身も谷に転落することになるだろう─―ヴィルケはそう考えると、そろそろ雪の斜面を登り、安全と思われるあたりに穴を掘った。雪ので一晩過そうと思ったのである。彼は冬を呪う言葉を口にすることも忘れていた。それほど不安が胸をしめつけていたのであった。

　昼の狩りの疲れからヴィルケはうとうとと眠ったらしかった。ふと気がつくと、どこかで犬が吠えていた。その声からみて、猟犬のエゾウに間違いなかった。

　ヴィルケは急いで外に出てみたが、吹雪の後、月が照っているだけで、エゾウの姿は見えなかった。どうやら雪の洞窟の壁の奥で声は聞えていた。ヴィルケは夢中で声のするほうに雪の壁を掘っていった。犬の声は次第に近くなった。やがてあたりの雪が青白くのように光りはじめ、間もなく、まるでトンネルの口がぽっかりあくように、ヴィルケは大きな広場に出たのであった。

　エゾウは激しく尾を振りながらヴィルケに向って吠えつづけた。ヴィルケはエゾウをなだめながら、③自分がどこに来たのかとった。そこにはすでに雪はなく、柔かない光が漂い、昼と夜のに似ていた。寒くもなく暑くもなかった。広場には憂鬱な顔をした人々がんでいた。散歩をする人も、ただ佇んでいるだけで自然と身体が移動しているような感じだった。

　猟犬のエゾウはヴィルケの先に立ってしきりと尾を振っていた。そして一軒の家のドアの前で激しく吠え立てた。間もなくそのドアがあいて年とった女が姿を現わした。それを見るとヴィルケは思わず大声をあげて駆けよった。それはずっと昔に死んだ彼の母であった。

　「おっさん、いったいこんなところでどうしているんです？　ずいぶんお久しぶりなのに少しも変っていませんね」

　「お前こそどうしてこんなところに来たんだね」

　ヴィルケは前の日からのことを母に物語った。

　「お前はこんなところにいてはいけないよ。早く帰ったがいいよ」

　「どうしてですか、おっ母さん、ここには雪も降ってなければ、てつく寒さもないじゃありませんか。こんなに居心地のいい場所は初めてですよ。いったいここはどこなんです？」

　「ここはみんなが〈あの世〉と呼んでいるところさ。お前のいうように凍てつく冬の寒さもなければ、日照りの夏の暑さもない。昼もなければ夜もない。ここには時間というものがないんだよ」

　「なるほど、だからおっ母さんは年をとることもないんですね」

　「ああ、向うの世界で言う意味では、ここじゃ誰も年をとらないよ」

　「それは素晴しいことじゃありませんか」

　「お前はそう思うかね。でも、ここを歩いている人たちを見てごらん。みんなそう楽しそうな顔をしているように見えるかね」

　「いいえ、そうは見えません。どうして憂鬱な顔をしているんです？　こんな理想的な世界にいて」

　「それはね、お前、ここでは昨日も今日も明日も全く何の変りもなくただ時がつづいてゆくだけだからだよ。日も照らなければ雨も降らない。朝も来なければ、夕方になることもない。いつでも今と同じだよ。暑くも寒くもなく、明るくも暗くもない。こうやって一年たち二年たち十年たち百年たつ。お前には分るかね、全く動きもなく、ただ時が過ぎてゆくということが」

　④ヴィルケはおどろいて母の顔を見た。昔の母は、ヴィルケがをすれば悲しそうな顔をし、言うことを聴かないと𠮟ることもあったが、今よりずっと楽しそうに見えた。今は悩みごとはないかわりに楽しみもない様子だった。ヴィルケは母の顔を見ていると、⑤百年も千年も何の変化もなくただ時がつづいてゆくということの意味がおぼろげながら分ってくるような気がした。「ねえ、お前」母は言った。「お前は気がついていないがね、春から夏になり、秋から冬になるってことが、どんなに人間を幸せにしているか、ここにいるとよく分るんだよ。私は冬になって池の氷を割って水を汲んだり、湿った小枝に火をつけようとしてる煙に眼をしょぼしょぼさせたり、泥水をはね上げる豚を押えつけて腹を裂いたりしたことが、今になると、まるで楽しい遊びであるかのように懐しく思い出されるんだよ。向うの世界にいたときには本当にいことと思っていたがね。ここから見ると、辛いなんてことはないんだよ。生きるってことはね、何から何までみんないいことなのさ。病気だって、苦しみだって、悩みだって、それはお前、この死者たちの永遠に沈黙した世界から見るとね、生きていることのしなんだよ。生きていることがどんなにいいことか、お前は、もう一度、向うの世界に戻って、心の底から味わわなくてはいけないね」

　「でも、おっ母さん、もう向うには帰れないんでしょう？」

　「ただ一つ方法があるよ。ここに鏡があるからね、その中にお入り。お前が、鏡の中の自分のほうが本当の自分だ、と思えば、それでもう鏡の中に入ることができるんだよ。そうしたら鏡をエゾウが生者の世界に運んでくれるからね。向うに着いたら、同じようにして、鏡の外に出られるはずだよ。死者の国でも生者の国でも、何でも信じることが存在をつくりだすのだからね」

　「でもエゾウはどうして向うへ帰ることができるんです？」

　「そりゃ、お前、犬ほど素直に喜びに生きているものはないからね。お前がエゾウを猟に連れ出すとき、どんなにエゾウが喜ぶか、知っているだろう？　エゾウが喜ぶのは報酬のためじゃないんだよ。ただそう連れてってもらうことが喜びなんだよ。こういうだけが自由に生者の国にも死者の国にもきできるのさ」

　ヴィルケが雪の洞窟で目を覚ましたとき、すでに朝の光がしていた。ヴィルケは手の中に小さな手鏡を握っていたのに気がついた。エゾウは彼の傍にっていた。

　その日の午後、ようやく村にりついたヴィルケは仲間の猟師に救いを求めた。二人が奇跡的に助かったのはヴィルケのおかげだった。

　二人の救助が祝われた日、ヴィルケは引き出しにしまった手鏡をさがした。しかし引き出しの奥には、手鏡はなく、鏡の形をしたしみが残っているだけだった。

　「⑥ああ、あれは鏡ではなく氷だったのだ」

　ヴィルケはそう叫んだ。

　外では女たちが火をいて祝宴の支度に忙しかった。⑦ヴィルケはその火の色ほど暖かで美しいものを見たことがないと思った。

注　経帷子……死者に着せる白い装束。

問１　傍線部①に「冬の長いこの国に生れたのは俺の最大の不運だよ」とある。ヴィルケがそのように言うのはなぜか。前後の文脈をふまえて説明せよ。

問２　傍線部②に「容赦なく夜が黒く山々の上におりてきた」とある。この情景描写にはどのような表現上の効果があるか。説明せよ。

問３　傍線部③に「自分がどこに来たのかと訝った」とある。この時のヴィルケの心情を説明せよ。

問４　傍線部④に「ヴィルケはおどろいて母の顔を見た」とある。それはなぜか。説明せよ。

◎問５　傍線部⑤に「百年も千年も何の変化もなくただ時がつづいてゆくということの意味がおぼろげながら分ってくるような気がした」とある。その「意味」とはどのようなことか。母の言葉をふまえて説明せよ。

問６　傍線部⑥に「ああ、あれは鏡ではなく氷だったのだ」とある。生還してこう叫んだ時のヴィルケの心情を、母との会話と関係づけて説明せよ。

問７　傍線部⑦に「ヴィルケはその火の色ほど暖かで美しいものを見たことがないと思った」とある。ここにはヴィルケのどのような内面の変化が表れているか。文章全体をふまえて説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　Ａヴィルケの生まれた国は雪の多い山国で Ｂ鉛色の空から雪が降り続き、木や草も枯れる死の季節が長く続き、しかもＣ冬になると山や森に獲物が沢山姿を見せ Ｄ辛くとも怠けられないから。

Ａ＝２〔ヴィルケの国が雪の多い山国であると指摘していれば可。〕

Ｂ＝３〔冬が死の季節であることの説明であれば可。〕

Ｃ＝２／Ｄ＝３〔特に腹立たしいことの内容が指摘してあれば可。〕

問２　Ａ「容赦なく夜が…おりてきた」という擬人化でＢ道に迷い必死になって歩き回る三人を追いつめるような緊迫感を生み、Ｃ「黒く」という表現で三人にこれからＤ厳しい状況が訪れることを暗示する効果がある。

Ａ＝２／Ｂ＝３〔追いつめる緊迫感を説明できていれば可。〕

Ｃ＝２／Ｄ＝３〔「黒」の意味を説明していること。〕

問３　エゾウの声を頼りに雪の壁を掘り進むと、そこにはＡ雪がなく、暑くもなく寒くもない、憂鬱な表情をした人々がたたずむ蒼白い光の漂う広場に出たので、Ｂ自分はどこにいるのかと戸惑う心情。

Ａ・Ｂがなければ全体０。

Ａ＝５〔雪の世界と対照的な広場の様子が説明できていること。〕

Ｂ＝５〔同様の表現であれば可。〕

問４　Ａ冬の厳しい寒さもなく年を取ることもない世界は、Ｂヴィルケにとって理想的だと思われたが、それを全く変化のない時が過ぎてゆくだけの空疎な世界だというＣ母が、かつての喜怒哀楽を失い、周囲の人々と同様憂鬱そうな表情をしていることに気づいたから。

Ｂ・Ｃがなければ全体０。／Ａ＝３

Ｂ＝３〔「理想的」を指摘できていること。〕

Ｃ＝４〔母の憂鬱な表情に触れていること。〕

問５　Ａ季節の変化や日々の生活のための苦労、病苦までがあるのが生きる者の世界であるのに対し、Ｂ死者の世界は永遠に変化のない喜びのない世界だということ。

Ａ・Ｂがなければ全体０。Ａ・Ｂを比較しながら説明できていること。

Ａ＝４〔同様の内容であれば可。〕

Ｂ＝６〔変化がないという指摘をしていること。〕

問６　Ａ母親の「死者の国でも生者の国でも、何でも信じることが存在をつくりだす」という言葉の通り、Ｂ氷を鏡と思いそこに映った自分の姿こそ実態だと信じ込むことによってこの世に戻ることができたんだというＣ実感と驚きの気持ち。

Ａ・Ｂがなければ全体０。

Ａ＝４〔母の言葉を指摘していること。〕

Ｂ＝４〔同様の内容であれば可。〕

Ｃ＝２

問７　Ａ冬を命が枯れる季節として憎んでいたヴィルケは、寒さをしのぐための焚き火すら忌み嫌っていたが、Ｂ死者の国での母との対話により、Ｃ季節の移ろいや時間の流れこそが人間の生を幸せにするのだと諭され、もとの世界に戻ると、仲間の猟師の奇跡的な生還を心から喜び、Ｄ命の輝きを象徴するかのような祝宴の火を賛美し、故郷の暮らしを自分のものとして慈しむ気持ちを持ち、Ｅこの世に生きる素晴らしさが表れているのだと実感するに至った。

Ａ＝１／Ｂ＝１

Ｃ＝２〔母の言葉を踏まえていれば同様の内容でも可。〕

Ｄ＝３〔嫌っていた冬の焚き火を賛美するという内容なら可。〕

Ｅ＝３〔同様の内容可。〕